

水稻新品種「ヒゴノハナ」について

1) 西山 壽・八木忠之・轟 篤・2) 小八重雅裕・3) 黒木雄幸・日高秀光・2) 本部裕朗・4) 吉田浩一・愛甲一郎
(宮崎県総合農業試験場・1) 九州農業試験場・2) 宮崎県農政水産部・3) 宮崎県宮崎農業改良普及所・4) 宮崎県えびの農業改良普及所)

Hisashi NISHIYAMA, Tadashi YAGI, Atsushi TODOROKI, Masahiro KOBAE,
Yukou KUROGI, Hidemitsu HIDAKA, Hiroaki HONBU, Kouichi YOSHIDA and
Ichirou AIKOU: A New Rice Cultivar "Higonohana"

水稻新品種「ヒゴノハナ」は、1989年から熊本県において奨励品種に採用され普及に移された。ここに本品種の育成経過並びに特性概要を報告し普及の参考に供したい。本品種の育成に関し、種々ご高配をいただいた関係県農業試験研究機関各位に深く謝意を表する。

1. 来歴及び育成経過

本品種は1976年宮崎県総合農業試験場において「ミナミニシキ」を母、「宮系902(ニシヒカリ)/コガネサリF₁」を父として交配を行い、世代促進、個体選抜、系統選抜を経て、1983年F₁より「南海92号」の系統名を付し、関係県に配布して地方適応性を検討してきたもので、1989年6月「水稻農林298号」と登録、「ヒノヒカリ」と命名された。

2. 特性の概要

1) 形態的特性 「ミナミニシキ」と比較すると、稈長はほぼ同程度の短稈で、穂長はやや短く、穂数はやや多い、やや短稈穂数型である。葉は中位、葉色はやや淡く、止葉は直立し草姿熟色は良い。粒着密度は中で少程度に短芒がある。ふ先色は黄白、脱粒性はやや易である。玄米の粒形・粒大は中で、腹白・心白の発生は極く少なく、光沢は大で、外観品質は「ミナミニシキ」に勝る良質である。搗精歩留は普通で、食味は「ニシホマレ」より良く「ミナミニシキ」並みに良い。

2) 生態的特性 出穂期・成熟期は「ミナミニシキ」より4～5日早い暖地では中生の晩に属する梗種である。耐倒伏性は「ミナミニシキ」並みの強であり、収量性は「ミナミニシキ」にやや劣る。

いもち病抵抗性遺伝子型は+と推定され、葉いもちは「ミナミニシキ」並みの中、穂いもちは「ミナミニシキ」よりやや弱い、やや強である。白葉枯病抵抗性品種群は黄玉群に属し、圃場抵抗性は「ミナミニシキ」より強く「日本晴」程度の中である。縞葉枯病抵抗性は「ミナミニシキ」同様罹病性である。

3. 奨励品種採用理由

熊本県の2種銘柄「ミナミニシキ」は県全体で50%強と極めて高い普及率となっているが、過度の作付集中による刈遅れや、籾枯細菌病等に起因する品質の低下が契機となり、売却不振銘柄と評価されるにいたった。一方、やや熟期の早い「ニシホマレ」は食味の市場評価が低い問題がある。そのため、県産米の品質向上と生産安定を図るため、「ミナミニシキ」にかわる良質、強稈、耐病の中晩生品種が強く望まれた。「ヒゴノハナ」は「ミナミニシキ」より出穂期・成熟期とも4日程度早く、品質

は「ミナミニシキ」よりほぼ1等級上位に格付けされる良質で、成熟期後の経過に伴う茶米の発生も少ない。また、いもち病抵抗性はほぼ同程度で、白葉枯病にはやや強い。以上のことから平坦地域を中心に「ミナミニシキ」、「ニシホマレ」の一部に替えて7,000haほど作付が見込まれる。

4. 栽培上の注意

- 1) 葉いもち抵抗性は中位なので、適期防除に留意する。
- 2) やせ地で施肥をひかえたりすると収量が上がらない場合もあるので、肥培管理に留意する。
- 3) 縞葉枯病には罹病性なので適期防除に留意する。

第1表 ヒゴノハナの特性概要

品種名		ヒゴノハナ	ミナミニシキ
形質	早晩生	中生の晩	晩生の晩
	草型	穂数型	穂数型
出穂期(月日)		9.3	9.6
成熟期(月日)		10.18	10.23
稈長(cm)		76	76
穂長(cm)		18.9	19.4
穂数(本/m ²)		412	373
芒の多少・長短		少・やや短	少・やや短
ふ先色		黄白	黄白
脱粒性		やや易	やや易
耐倒伏性		強	強
葉いもち		中	中
穂いもち		やや強	やや強
白葉枯病		中	やや弱
縞葉枯病		罹病性	罹病性
玄米重(kg/a)		49.7	52.0
同上標準比率(%)		96	100
玄米千粒重(a)		22.0	22.9
玄米品質		上下(4.2)	中上(4.4)
食味		中上	中上

注) 育成地における1981～88年の標準栽培